桜烏賊

森岡　正作

吹雪く花突つ切つて来る鼓笛隊

飛翔とは美しき言葉や山毛欅芽吹く

茹でられて恥ぢらふ色の桜烏賊

山葵田に手足芯まで覚めにけり

暮しにも起伏ありけり花は葉に

鮎の子に勢の性のありにけり

退職や鮎解禁を楽しみに

飼はれゐる

鯉幟の季節なので、登四郎先生にどんな句があるかと全句集を捲ってみたが鯉幟を詠んだ句は見つからず、少し不思議に思っていて目に止まったのが、〈**飼はれゐる山女魚さわげり山雨来て**〉という御句である。私にとって山女魚は少年時代によく釣った魚だけに何となく嬉しい気持ちになった。先生は山国でも旅行されたのであろうか。養殖ということでもなければ山女魚は宿の庭の池に放たれていたのであろう。渓流にいてこその山女魚であり、先生は狭い場所の流れもない池で、静かに尾を振っている魚を憐れんだに違いない。そこへ急に山の雨が強く降り出したのである。うち重なる水輪の下で右往左往する山女魚の姿に、今度は山女魚本来の野性味を先生は感じて見つめていたのである。

山女魚は二十センチぐらいの読んで名の通りの美しい繊細な魚であり白身で美味しい。それに対して男性的な魚は獰猛な岩魚であるが、先生には岩魚の句は多分ないと思う。